

ラドヤード・キプリング

1 親玉ダ・ソーンのパラッド

(ビルマ戦争 1883-85年)

これは 親玉ダ・ソーンのものごと
ときはビルマ シーポー王朝の 跡目を狙った男の話
こいつはアラローン地方を荒らしまくっていた
いかにしてこの悪が その最後の運命と遭遇したかは 着払いのお楽しみ
政府牡牛列車のハレンドラ・ムケルジの手にかかったその最期
列車重役のハレンドラ・ムケルジなる男の手にかかったその末路

親玉ダ・ソーンは 勇敢な野武士
その剣とライフルは 金飾りがほどこされ

家来が捧げ持つ 孔雀の軍旗は
金糸の縁取りでごわごわと また人間の血糊でさらにごわごわと

強い敵は撃ち殺し 弱い敵は切り払う 5
サルウィーン川の雑木林から チンドウィン川のチーク林まで股にかけ

高貴な者は吊るし首 下賤の者は打ち首
老婆たちは 油を浴びせて焼き殺す

海の向こうの故国では ブン屋がわめく 10
「愛国者 お国の為に戦う」と

でも奴らどもには 分かるもんか
カーキ色の軍服を着た 疲れきった白面の防人のことなんぞ

ジャングルをさまよい 掘っ立て小屋で眠り
沼地で死に 泥田に埋葬され

女王の命令に 命を捧げる様を 15
それもただケルト誇り 御国の栄えのために

さて 親玉^ボダ・ソーン^ニの第一^カの敵^タは
ブラック・ティローン連隊のオニール大尉

率いる兵士は 屈強の七十人
あのやくざな親玉^ボを追いつめる 20

ゴールウェイ ラウス ミーズ出身の若者らは
ジョークを飛ばし 死んで行く

よどみなく 熱をこめて
ごろつきオニールの靴底の泥まで称える

かれらの浮世の務めには 常にあのじゃがいも大飢饉の暗い影がさし
めざす敵^カは いつも行方をくらます 25

やがて灼熱の陽で焼けた ブラック・ティローンの兵士たちは
親玉^ボダ・ソーンに親しみさえ 覚えはじめ

まことに やつらが略奪行為さえ止めてくれれば
親玉^ボと奴を追うおれたちは 心を許す友同志 30

斥候^{セッコウ}の伝令に 夜間の行軍
霧をついての突貫^{ハクヘイセン}に 白兵戦

ものかげからの一斉射撃 木立の間に散らばる味方の死者
腰布と重い翡翠^{ヒスイ}の耳飾りがちらりと見える

燃えさかる村の炎 殺された村人のおびたしい数 35
またまた・・・ 親分の一味が襲ったのだ

うまくやりやがったと 軽口すきなアイルランド人の性^{サガ}のまま
やつらの手管^{テクダ}と戦術に舌を巻く

村人の死体を埋め 焼け焦げた牛の肉をほぼぼり
そしてまた 親玉^ボのあとを追う 40

やがて 無駄骨だと 言うかわり 人は言う

「いつになったらごろつきオニールとその部下が 親玉の首を取って帰ってくるか」と

討伐隊は親玉一味を 山から里へ追い出す
すると奴らは急いで 再び山へと逃げ込む

ついに奴の略奪と急襲の力をそぎ 45
自慢の 砦 から追い出した

と思いきや 明けの明星の光が消えるころ
人影のないキャンプにもどると 村は焼かれている始末

焼け焦げた十字架は 朝日に黄金色に輝くも
その上に吊るされた死体は 堅く冷たい 50

夜明けの風は 陽気に吹き抜ける
高く伸びた草は 風にあおられ 頭を垂れる

すると突然 草の間に
閃光がきらめき 硝煙が渦巻く

ブラック・ティローンのオニール大尉が 55
尺骨に弾丸をくらったのだ
憎っくき 敵 親玉ダ・ソーンの贈り物だ

(ところで この弾丸は電線を叩いて造ったもの
肉に食い込んだ棘で いつまでもずきずきうづく)

・ ・ ・ ・ ・

銃創は案の定化膿した 60
マンダレーの蒸し風呂さながらの兵舎ではあたりまえ

左腕はずきずき痛む 大尉は毒づいた
「もう一度 奴を追いたいものだ」と

高熱にうなされた大尉が言った
「奴の生首を一目みせてくれなら 百ルピーくれてやる」 65

病院の吊りうちわが キーキーブンブン唸る中
大尉の言葉を 列車重役のハレンドラがちゃっかり聞いていた

ハレンドラは青々と瑞々しい 籐の垣根を作ろう考えていた
ダッカの貯め池の側に立つ我が家のまわりを囲もうと

ハレンドラは女房と ハイスクールに通う^{せがれ}倅のことを考えていた 70
銃も一丁欲しかったが それはやめた

彼の眠りは 恐ろしい幻影に破られた
銀と輝く白髪^{ホニ}の親玉の生首の幻影に

彼は決意を胸に秘め 出かけていった 75
車夫への払いも半分けちるちんけな悪党

・ ・ ・ ・ ・

月日が経つのは速いもの 事態の悪化も速いもの
親玉^{ホニ}め またぞろ略奪行為をおっぱじめた

しかしオニール大尉は長引く討伐戦から手を引いて
はるか離れたシムーリーで妻^{めと}を娶った

新妻は^{きやしや}華奢な姿の別嬪さん 80
金色^{こがね}の髪に 優しい心根

わが身を抱く^{つま} 夫の腕が
敵^{かたき}を真っ向唐竹割^{からたけわ}りした男のものだと つゆ知らず

愛を囁くその唇が
敵^{かたき}にとどめをさせと下知^{げち}したこと ご存じない 85

軽やかな妻の吐息に うれしや極楽と輝くその^{まなこ}眼が
かつては死の淵にあっても恐れ知らずであったことも

(かかること 男はみなつねに
清純無垢の花嫁からは隠すもの)

そして大尉は過去のことを忘れていた 90
部下のことも ましてやハレンドラのことなど思いもしない

カトウー街道のぬかるみでは
政府^G牡牛^B列車^Tがゆっくりと荷を運んでいた

脂^ギでシミ一つ無くピカピカ磨いた
しんがりの車に ハレンドラが座っていた 95

眼の前にはいつもヒラヒラと
しかめ面した白髪^ボの親玉^ニの生首の幻影が飛んでいた

そのうち先頭の車が泥にはまった クーリーが引っ張り
車夫は鞭をふるい 護衛はわめいた

するとジャングルから 雄たけびあげて 100
親玉^ボダ・ソーンとその手下どもが 飛び出した

匪賊らがぶっ放す 旧式の超^つでか筒短銃に
こちらはスナイダー銃がうなり カービン銃が轟く

陽気なレボルバー拳銃が パンパンと
銃剣に当たって ガーンと響く 105

褐色の肉は 銃剣を突き刺せば青くなる
銃剣の刃を ぐいとひねって抜く時もまた然り

白い牡牛どもは 縞^{オニキス}瑪瑙色の目をして
死者の魂が抜けていく様をじっと眺める

一斉射撃の 硝煙の上に 110
親玉^ボの 孔雀の旗印が揺れ動く

ハレンドラのやつ これを見て 震え上がり
まわしをぐいと締めなおし すたこら逃げようとした

ところがこれも 運命のいたずらか 親玉^ボはたった一人で

しんがりの車を襲おうとした 115

車のなかから ハレンドラ 悲鳴をあげて転がり落ちる
それも 親玉の真上に どすんとばかり

ここ何年も ハレンドラは お国に仕え
金はしこたま 太鼓腹

130 キロはたっぷりあると 荷役は知っていた 120
親玉の胸に のしかかったその重さ

しかも 130 キロが高いところから落ちてきたのだ
肥大した親玉の脾臓にや最悪だ

おお 130 キロの衝撃のため 取っ組み合いをする間もなく
親玉は牡牛のように倒れ でかい材木みたいにのびたのだ 125

やがてハレンドラは親玉の腹の上で 恐怖におののきながら
親玉分のいまわの息がヒューヒューと漏れるのを耳にした

こうして なんとも不名誉な 死に様で
チンドウィン川の親玉が 息絶えたのである
・ ・ ・ ・ ・

さて舞台は回ってシムーリー オニール大尉はすっかりくつろぎ 130
花嫁を膝にのせ いちゃついている最中だ

あたりでは弾丸が命中する音と負傷した兵の叫びが
模糊とした悪夢のように 交じり合う

修羅場の汗は 遠いかなたに忘れ去られ
ヒナギクが咲き乱れ 灰色の野猿が遊び戯れる 135

剣帯から解き放たれ 刃を手挟むこともなく
いまやオニール大尉は神や仏の境地

シムーリーに向かう山道を 音に聞こえた難路を
郵便の袋を肩に 飛脚が登ってくる

「オニール大尉殿宛荷物 百十ルピー 140
代引きでお願いいたします」

後刻

(朝食そっちのけで ねじジャッキ 金槌^{かなづち}というありあわせの道具で
油布^{ゆふ}を引き裂き チーク材の箱をこじあけ 蠟封印^{ろうふういん}をこそぎ落とした)

真っ白なテーブル掛けの上に ドスンドサツと転がり出たのは 145
目を剥き口をあけた 親玉^{おんぎゆ}の生首

頭のとっぺんに糊で貼り付けた手紙が一通 文面かくの如し

野戦部隊

駐屯地にて

一月十日

150

閣下 仰せのとおり ここに謹んで
ここに謹んで親玉^{おんぎゆ}の首級^{くび}をお送りいたします
(本書状の下をご覧ください)

この首級は私自身 高等教育が耐え忍ぶよう教えた
最も血なまぐさい戦いで勝ち得たものであります

目下不景気にて手元不如意につき 失礼ながら 155
郵便小切手にて百ルピー送金願います また

よろしければ 少々色をつけてくださるも結構
私が流した血代として百ルピーでは安い買い物 また家では子らが飢えております

閣下がこれから先も なにとぞ
わが政府^G牡牛^B列車^Tをお引き立てくださるよう 160

そして どうかどうか 私のお願いをお聞き届けくださるよう お願いいたします
私こと

お情け深き ご主人さまの

しもべたる

H. ムケルジより」

165

ウサギがガラガラ蛇の威力にすくんだごとく

薬^{やく}が切れると シャブ中の目がむくむがごとく

馬が頭上^{まぐさおけ}の 秣桶に 首を伸ばすがごとく
期待にそばだち 愛の囁きを待ち望む耳のごとく

花嫁の腕からはなれ 無表情にゆっくりと 170
大尉は大親分の首級に かがみ込んだ

朝食の新しいスプーンやきちんと置かれたナプキンの間におかれた
親分の首級を じっと眺める^{あいだ}間にも

解き放たれた心は 過ぎ去った遠い日々に戻った
白兵戦や 硝煙や 炎へと 175

夜間の強行軍 暁の奇襲のこと
夕間暮のバンジョーの音 夜明け前の戦友の埋葬のことへと

沼から発する悪臭 それはひどい 突き刺さるような悪臭だった
上手から短刀を振り下ろし いまわの叫びを黙らせたとき

あの激しく発せられた アイルランド語の呪い 180
クッタモウ川に並んだ黒こげの十字架を見たときのあの呪い

放棄された船が 波間に漂うがごとく
大尉の心は花嫁を離れ 過去へとさまよった

ずっとずっと昔 春から冬へと
マルーンからツアリアーへと 親玉^{ボニ}を追った昔へと 185

溺死体が ゆっくりと深い水底から浮かび上ってくるように
大尉の目は うつろな殺戮^{さつりく}の情熱でにぶく光った

命をかけてオニール大尉と戦った部下たちは
奥方と比べなんの恐れる気色なく 大尉の顔を凝視した

奥方はこれまで自分に引き止めていた夫を これ以上は引き止められなかった 190
四か月の蜜月が 永遠に大尉の心を支配すると思ったのは錯覚だった

奥方は二つの恐ろしい首を見つめた たがいに向き合った首を
かたや刀傷を負った黒い親玉^{ホー}の苦悶の生首 こなた紅潮した夫の赤ら顔

奥方の知るよしもない大尉の心

解く術もない暗い過去へと飛び去った大尉の心

195

ニタリと笑ったその顔は覚えていた 怖れる気色なく手で生首に触れたのだ
そしてはっきりこうつぶやいた 「まだ翡翠の耳飾りをつけてやがるな」

そしてうなずき 友に向かってうなずくように優しげに

「お前は立派に戦ったよ だが最後はお前の負けだ」

幻影は掻き消え 激情のあとに悔悟が生まれた

200

「奴は俺の言ったあの言葉を ここまでやりおったか」

「ハレンドラとやらに一筆書こう」 罰当たりの言葉をちりばめて

大尉は奥方のところへもどった すでに気を失っていた奥方のもとへと

* * * * *

これは作り話か いやそうじゃない シムーリーへ行き

二人の間に生まれた赤ん坊を見てご覧 満一歳のお嬢ちゃんを

205

アイリッシュの目をした かわいいキャサリーンちゃん

いつも毎朝広小路をよちよちお散歩してるのね

もしこの娘^この右肩の紐がだらりとはずれたら 見えるだろうよ

銀地に赤^{あざ}の痣が ぎざぎざの親玉^{ホー}の首の痣が

(榊井幹生記)